

# 討論塾 入門問答集

討論塾をよりよく理解していただくために

文責：福地俊夫（事務局）

以下、参考文献は丸数字で取り上げます。

- ①竹内芳郎（1999）『天皇教的精神風土との対決「討論塾」—その理念と実践』三元社
- ②竹内芳郎編（2013）『討論 野望と実践』閏月社
- ③戸田山和久（2011）『「科学的思考」のレッスン』NHK出版
- ④菊池聡（1998）『超常現象をなぜ信じるか』講談社
- ⑤ジェイムズ・S・フィッシュキン（2011）『人々の声が響き合うとき』早川書房

## A 討論塾の基本

### 1 そもそも討論塾とは何をするところですか。

「塾」という言葉から、子どもの学習塾のようなイメージを持つ人もいますが、そうではなく、近世より近代初期にかけて開設された私塾で使われる「塾」の意味です。ご存知のように、慶応義塾（福沢諭吉）、松下村塾（吉田松陰）などがあります。

討論塾は、様々な背景を持った人たちが、討論実践を通じて互いに学び合う学習の場です。民主主義や討論については、この後に詳しく説明しますが、民主主義の視点で捉えると、私たち市民の問題を、自分たちの問題として討論することが重要です。

討論塾では、討論を実践するという過程の中で、日本人が苦手としている討論の在り方・方法や討論時の態度なども学習してきました。そして、討論文化を日本社会に広げたいと考えています。

### 2 どのぐらい続いているのですか。

討論塾は、1989年に「討論なしには民主主義はあり得ない」という理念のもとに、哲学者・竹内芳郎氏（2016年没）が主宰者として始めました。

今までに約350回以上の討論会を行い、その内容をまとめた2冊の本（①②）を出版しました。開設より30年以上続けてきたこととなります。以前はだいたい月に1回、討論会を開催していましたが、最近では2か月に1回のペースで行っています。1回当たりの参加者は10人前後です。

### **3 勉強会や講演会とは違うのでしょうか。**

自分が知らない情報を得ること、人とコミュニケーションすることなどは共通する一部分です。しかし、討論塾では、情報を得た後に、自分の意見を述べて討論することを目指しています。また、単なるコミュニケーションではなく、正しさを目指した明示的コミュニケーションを継続することを重視しています（詳しくは後述します）。

確かに、現代社会の様々な問題に関して、情報を正確に理解し、論理的に考えて自分の意見を作っていくことは大変なことです。さらに異なる意見を持つ他人を説得することは時間のかかることです。しかし、それを少しずつでも他人とともに学んでいこうという場です。ある種の厳しさ・大変さもありますが、一方で喜びがあるのも事実です。

### **4 政治的な目的を目指す社会運動や市民運動ですか。**

政治的な運動組織ではありません。ただし、「個人的なことは政治的である」というフェミニズムの考え方がるように、私たちの毎日の生活の問題はすべて政治に関わります。例えば、消費税や年金や原子力発電所の問題を見ればすぐに分かるように、政治家が国会で決めたことが、私たちの生活にすぐに影響を及ぼします。討論塾は、私たち市民に関わるすべての問題を徹底的に討論する場なので、当然、政治的な問題も討論の対象となります。

討論塾として、特定の支持政党や個別に応援している政治家などはありません。ただし、討論の過程において、この政党のこの政策は賛成だ、この政治家のこの考え方は賛成できない、ということは当然あります。討論において重要なことは、政党名や政治家名で政策・考え方を判断するのではなく、政策・考え方の内容そのもので是非を判断することです。

社会運動や市民運動は、とても重要な民主主義社会における活動の一つですが、討論塾の目的は、討論を実践することであり、討論実践そのものも同時に民主主義社会における重要な活動と捉えています。実際に討論により自分の考えを新たにして、日常での発言や行動が変わり、社会に影響を与えることもあるからです。

### **5 運営はうまくいっていますか。**

今まで討論塾で様々なテーマを時間をかけて討論して、考えを深め合い、素晴らしい成果を出してきたかという点、決してそうではありません。討論塾開設の頃から、本当に様々な問題が起こっています。討論過程において塾員同士の激しい感情的な対立などもありました。それで去って行った塾員もいます。塾の事務・運営についても様々な挫折・失敗がありました。それらの挫折・失敗も記録し、考察・検証しています。

人間同士が集まれば、考え方や立場の違いによって、対立やいざこざが起こるのは当然のことです。討論塾では、それを隠すのではなく、明るみにして、さらに討論塾が目指している討論によって解決しようとしています。つまり、嫌いな人・相性が合わない人とでも、討論を通じて最低限の信頼関係を作っていこうということです。

## B 民主主義と討論

### 6 民主主義とは何ですか。

民主主義の問題は、歴史・理論・現状など広範囲に渡り、詳細にここで論じることは難しいため、今までの討論塾の議論を踏まえて、ごく簡潔に取り上げます。

一般的に民主主義は、国民に主権があることとされています。言い換えると、国に関わる問題を国民が決める権利を持っているということです。では、なぜ国民に主権があるのでしょうか。

人間の「自由」が民主主義の根拠になります。経験的に言うと、人間は皆、好み・価値観・意見・行動などが異なり、自由な存在であるということです。

このような自由な存在である人間がバラバラに勝手なことをしていると、社会が成り立ちません。いきなり誰かに暴力を振るわれたり、物を盗まれたりしていたら、安心して生きていくことができません。それで、皆で契約をして、国家のような組織を作ったらどうか、ということになります（「社会契約説」と言われます）。例えば警察のような国家権力を皆で承認し、ルールに違反した人は、強制的に捕まえてもよいようにお互いに契約します。

このように、自由な人間たちがお互いに約束事を作っていくことが原則になりますが、絶対的に正しい約束は誰も分かりません。なぜなら、人間が自由であるということは、同時に人間は変化し続け、不完全な存在であるということだからです。そうであれば、対等な立場で、お互い自分の意見を言い合いながら、約束事を作り上げていく以外の方法はありません。つまり、国「民」が「主」となって、言い換えると民主主義を基に、自分たちの社会の約束事を決めなければいけないということです（専門家の役割については後述します）。

### 7 民主主義においてなぜ討論が必要なのですか。

既述したように人間は自由な存在であるので、それぞれ好み・価値観・意見・行動などが異なります。自由な存在である人間が同じ場所において、社会を作っているため、皆が納得できるルールや政策が必要となります。また、どの人間も自由であるということは、当然それぞれが平等であるということです。それなら、お金の持っている人、力の強い人などの考えだけを押し通すことは許されないでしょう。

ルールや政策を決める際、データなどの事実や論拠を検証し、「正しさ」に少しでも近づくために、討論が必要になるというわけです。正確な事実や論拠がなく、その場の思い付きだけで政策を選んでいたら、皆のためになる適切な政策からはほど遠いものになってしまうでしょう。

市民が公の問題を論じるときに必要なデータを知るためには、公的機関の情報公開が重要となります。一般的に権力者は自分たちにとって都合の悪い情報を隠そうとしますが、正確な情報を抜きにいくら討論したところで、正しい結論に至ることはありません。討論の前提として、正確な情報が必要になります。

民主主義社会においては、最終決定は多数決が適切だと思われていて、制度としても多数決を採用しているのが普通です。しかし、多数決で決められたことが常に正しいかと言えば、歴史事実が示す通り、そうではありません。天動説の時代では、多数派が天が動くと信じていましたが、科学の進歩によって誤りであることが明確になりました。確かに、政治的な意志決定の場合は、迅速さが必要なことが多いため、多数決によって決定せねばならないときも多いでしょう。しかし、原則的に、できる限り時間をかけて納得のいく討論をした上で、決定しなければなりません。

## 8 専門家の意見が正しいのではないですか。

高度な現代社会においては、様々な分野で専門家の役割の重要性が増しています。一般の人たちは、すべての専門分野について精通することは不可能です。そのため、政策を決定するときに、専門家同士が討論して決めていけばよいのではないのか、そのほうが正しい結論が出せるのではないのか、という考え方をする人も少なくありません。

しかし、専門家同士でも意見の分かれる問題は多数あります。例えば、新型コロナ感染予防については、医学・経済学・教育学などの分野の異なる専門家たちが様々な提案を行っています。専門家だけでは最終的な結論を出すことができません。ですから、私たちが生活している社会にとって、新型コロナ感染予防として何が最も適切な政策なのか、市民である私たち自身も主張して、専門家とともに討論していく必要があります。自分たちのことは自分たちが決めるという民主主義の基本理念が重要です。討論塾では、ある問題について専門家でも素人でも自由に発言できます。特に専門家は素人が分かるまで説明しなければならぬという理念の下に実践しています。

## C 討論の方法

### 9 討論会はどのように運営されているのでしょうか。

基本的に問題を提起する人がいて、その内容を巡って討論をします。問題とは、私たちの日常生活に関わるすべての問題です。特に現代社会において重要な問題に関しては、その分野の専門家を招聘し、専門家の立場から問題提起してもらうこともあります。ただし、専門家の話を聞くだけでなく、提起された問題を討論し、内容を吟味し、深めていきます。

問題提起と討論の内容は、文字化し記録として残します（討論塾の報告なので「塾報」と呼んでいます）。さらに、その塾報を基に再び討論を続けます。つまり、同じ内容を何度も討論することにより、より内容を吟味して深めます。あの討論会では、自分はこのように述べたが、後から考えて意見を変えることにした、などと自由に修正ができます。塾報に関する討論会も塾報として文字化するので、その塾報も討論対象となります。討論参加者が納得すれば、取り上げられた問題に関しては、その時点では討論は終了します。ただし、塾への新たな参加者が過去の塾報を読んで、納得できない箇所があれば、その箇所を問題提起し、

再び討論できます。

討論塾では、討論実践の過程を重視しています。ある一定の結論を目指すことが目的ではなく、問いを発する、疑問を呈する、異議を唱える、などを大事にしています。一般的な日本の教育方法である「結論を知って覚えること」とは真逆の立場というわけです。

塾報作成者は、討論会の音声をすべて聞いて文字化するため、確かに負担がありますが、何度も聞き返して、客観的に文字化するので、理解力や思考力が必要とされ、作成者にとって学ぶべきことが多いです。

## 10 明示的コミュニケーションとは何ですか。

次の例をご覧ください。

「会ったときで構わないから、ときどき会議の内容を報告してもらえるかな。」

「毎週月曜日の午後 5 時まで、前の週の各会議内容の要約を、それぞれ 100 字程度でメールで必ず報告してください。」

日本のビジネスで重視されている、いわゆる「報連相」の文脈での発言です。異なる文化の外国人には後者の発言のほうが遥かに分かりやすいでしょう。現在、多くの外国人が日本の職場で働いています。外国人のすべてと決めつけるのは誤りですが、それでもビジネスの場では、外国人から見た日本人の分かりにくい曖昧なコミュニケーション方法が、取り上げられることがあります。恐らく日本人同士であれ、前者の指示では、誤解が生じる可能性が高いでしょう。

日本語は一般的に「文脈依存性」が高い言語と言われています。発話の意味が文脈に依存しているため、言葉に表れていない意味を文脈、つまり場面や人間関係から推測するしかありません。いわゆる「察しの文化」「腹芸」「忖度」と言われるものです。

先に挙げた具体例は、後者の表現のほうが、誤解なく仕事が円滑に進むことが明らかで、このような表現方法が「明示的コミュニケーション」です。民主主義社会における討論においても、明示的に言語を用いる必要があります。専門家との討論でも全く同じで、専門家が、たぶん大丈夫でしょう、と言ったときに、「たぶん」を確率で示してください、「大丈夫」とはどんな意味ですか、全く安全という意味ですか、などと「ツッコミ」を入れて、明示化していくことが重要です。

ただし、人間同士のコミュニケーションをすべて明示的にせよ、という意味では決してありません。コミュニケーションにおいては、言語以外にも、表情・身体・イラスト・図などを利用することもありますし、曖昧な表現方法や、無言という状態で意味を伝えたほうがよいときもあります。だから、明示的コミュニケーションは、人間コミュニケーションのごく一部です。しかし、民主主義社会において、公益や科学的に妥当な知見を求めて討論するときには、明示的コミュニケーションが必要になります。

## 11 意見が違う場合でも、討論をする意味がありますか。

まず、討論の対象となるテーマであるか否かが重要です。例えば各個人の好みは討論の対象にはなりませんし、討論をする必要もないでしょう。ラーメンが好きな人とカレーライスが好きな人が、どちらの好みが正しいかということテーマに討論する意味はありません。また、科学的な証明が不可能なことも同じで、例えば死後の世界の存在の是非について討論はできません。もちろん個々人が死後の世界を信じるか否かは自由ですが、存在の是非を討論によって検証することはできません。

それから、そもそも人間は自由な存在であるのですから、意見が異なるのは当然です。そして、同じ社会を生きていくために、例えば消費税や年金や原子力発電所の問題にしても、討論をして最低限の約束事を決めなくてはなりません。そうしなければ、共存できないでしょう。

討論の過程において重要なのは、まずはお互いの意見を尊重することです。つまり「相対主義」の態度です。自分の意見とは異なる人の存在を認めることが言うまでもなく大切です。しかし、私の意見とあなたの意見は違いますね、討論しても仕方ないですよ、意見が違うのだからお互い尊重しましょう、ということでは、もし容認すべき倫理的行動等が食い違っていたら、同じ社会を形成することは困難になってしまいます。極端な例を挙げると、理由なく人を殺してもよいという人と、理由なく人を殺してはいけないという人とは共存は不可能です。だから、お互いの意見を尊重するだけという「相対主義」のままでは、同じ場所で生活できません。一方で、他の人の意見は何であれ、自分の意見を変えるつもりは全くないという「絶対主義」のままでも、共存はできません。そのため、討論塾では、相対主義も絶対主義も乗り越えるという意志をもって討論実践をしてきました。具体的には、異なるお互いの意見を認めた上で、その意見の中にある共通点や相違点を明らかにしながら、また根拠やデータを検証しながら、お互いが納得できる正しさを目指して討論を続けることです。

## D 具体的な問題

### 12 自己主張は相手の気分を害しませんか。

一般的に日本社会では「自己主張」は嫌われることが多く、常にそれをしていると、煙たがられたり、立場の弱い人は叩かれたりすることがあります。また、その場の「空気」によって、すなわち「同調圧力」によって、自分とは異なるその場の意見に従ったり、日本社会の多数派の意見を言ってしまうこともあります。しかし、既述してきたように、人間が自由な存在である限り、各人が様々な価値観・意見を持って生きています。自由であるということは、同時に「不完全」な存在なのだから、誰かが正しい意見を持っているわけではありません。また多数派の意見が正しい保証もありません。そうであれば、対等な立場でまずは皆が自己主張することが大切です。そして、正しさを目指して、討論を重ねていけばよいだけのことです。

現在、日本では外国文化を持った人たちが多く、また、LGBTの人たちも顕在化し

ています。今後、日本は少数派の人々が自由に自己主張できるような社会になっていったほうがよいでしょう。そして、自己主張をした上で、討論を通じて民主主義社会を作っていくべきではないでしょうか。討論塾でもより多様な人たちにも参加していただき、意見を交わしていきたいと思っています。

### 13 討論でケンカになりませんか。

確かに、日本社会では、自分の意見を明確に述べて討論を始めると、感情的になりケンカになってしまう傾向があります。しかし、重要なことは、常に冷静に討論しましょう、ということではなくて、むしろ人間が感情的な生き物であることを認めて、討論を続けることです。人間は誰でも一時的に感情的になることがあります。その後、冷静になったときに、再び討論を始めればよいだけのことです。実際、日常生活においても、感情的になった後に、冷静に自分の考えを説明できることもあります。

フランスのフレイネ学校の幼稚園児の「討論によってお互いに批判し合えるので、ケンカしないでも済むんだ」という言葉があります。日本では、討論とケンカとがごっちゃになってしまっていますが、この幼稚園児にとっては、討論がケンカと対立する物、つまり、ケンカを回避するための手段として把握されています。自分の思いや主張を明示的に丁寧に説明することにより、相手からの納得を得ることができ、ケンカを避けることができるわけです。私たちは、このような幼稚園児の態度からも討論の意義を学ぶ必要があるでしょう。

### 14 自分の意見を変えたくないのですが。

自分の意見を全く変えるつもりはない、という絶対主義的な人も存在しますが、実は人間が自由であるということから考えると、矛盾していることがすぐに分かってしまいます。人間が自由であるということは、常に変化し続ける存在であるということです。今日の自分は、昨日の自分とは明らかに異なる存在です。もちろん同一性はありますが、時間の経過とともに人間は変化し続けます。この事実を顕在化させ、受け入れることが重要です。自分は絶対に変化しないと主張しても、事実と完全に矛盾してしまい、説得力がありません。

実際の討論会においても、討論を続けることにより参加者が自分の意見を変えることは当然あります。むしろ、討論塾では、討論により自分の意見を変えた人こそ最も学んでいると捉えています。なぜなら、自分の意見を変えるのは、自身の今までの固定観念などに気づき、大きな発見があったときだからです。本当の意味で学ぶということは、知識を貯め込むのではなく、自身の固定観念や思い込みに気づき、そこから解放されることです。自分の意見を変えるということは、本気で学んだ証拠です。

そうは言っても、自分の考え方が批判されて、その批判を自分で認めるのは、心理的にはつらいことです。しかし、それこそが動物にはない人間としての「歓喜」です。討論塾では、「快樂」と「歓喜」とを分けて把握していて、前者は、食欲や性欲などの生理的欲求が実現できたときに得られるもので、後者は、思い込みから解放され、新たなことを学び取ったと

きの人間としての喜びです。討論の過程における自分の意見の変更はもちろん後者です。

### 15 考え方が対立したままの場合、どうなるのでしょうか。

討論をする過程において、参加者の互いの意見が対立したまま平行線のときもあります。人間が自由な存在である以上、違いがあるのが当たり前で、討論してもお互いが納得できないときもあります。討論塾の歴史でも、1回 4～5時間の討論会を何度経ても、合意できないときもありました。このようなときは、討論をし続けることも一つの方法ですが、お互いが合意できていないことを合意することも重要です。合意についての合意なので、「メタ合意」と呼ばれます。重要なのは、いくら討論しても納得がいかないとき、こんな人とは討論しても無駄、やめてしまおう、とケンカ別れをしてはいけないということです。現段階では合意に達していないことを明示的にメタ合意して、討論を続けることが重要です。もちろん、少し時間を空けて、考え直してから再開することでもよいでしょう。

### 16 いくら話しても意見の違いが解消しないとき、討論で解決するのでしょうか。

③p.215～によると、デンマークに「コンセンサス会議」というものがあり、それは科学の専門家と一般の市民とが討論をして、合意を目指す会議だそうです。その会議では、討論を通じて合意が形成されています。アメリカ（⑤などを参照）でも政治学の専門家が、「熟議民主主義」の実験を行っており、熟議前と後とで、かなり意見が変化する事例が多いようです。日本でも NPO の団体などが実験を行っていて、討論により意見が変わる事例があることが実証されています。

一方で、認知心理学系の本ですが、④などによると、思い込みが全く変化しない事例などが取り上げられています。さらに、自分が間違っていると自覚しても、意見を修正しない事例もあるようです。そのような人たちを批判しても仕方なく、むしろ誤りを認めたがらないのが人間の一つの側面であると捉え、自身もそのようなことがないように自戒すべきだと思います。③p.295～には、著者の戸田山氏が血液型性格判断に科学的な根拠がないことを丁寧に説明しても、でも私は血液型性格判断に頼ったほうが生きるのが楽なので、信じ続けます、というような感想を述べた学生の例があります。

変わり続ける人間像と、変わることができない、変わることを拒否する人間像と、真逆の両面を理解しておくことが重要なのではないのでしょうか。